

《2024年度 ICD日本部会 年末集会 特別講演》

足し算で生きる ～がんステージ4からの生還～



フリーアナウンサー

笠井 信 輔

●抄 録●

がんのステージ4でどのような精神状態、副作用に苦労したのか？ 令和時代のがん医療のポイントとは？ “昭和患者”は意識を180度変えないと適切な医療が受けられない。自身も昭和患者である講師が、がんで体験した令和医療を語ります。

キーワード：がん医療、悪性リンパ腫、アピアランスケア

皆さまこんばんは。笠井と申します。妻と共にこの場に参加させていただきました。私、フジテレビで33年間アナウンサーをしており、そのうち20年間は「とくダネ！」の担当をしていました。皆さんも一度は見たことがあると思います。フリーになってからは、講演会などに呼ばれる機会が増えましたが、今日は北村さんのご縁でこうして集まっていたいただいたこと、本当に感謝しています。

「とくダネ！」は小倉さんと一緒に20年やってきました。8年間がんと闘ってきたことを思うと、小倉さんは覚悟はできていたような気がします。亡くなる2日前に電話をしたときは、「もうあきらめたよ」と言っていました。その言葉には、絶望ではなく、やりきったという小倉さんなりの思いが込められていました。「あきらめた」という気持ちの中にも、まだ少し生への執着が見えたことを覚えています。結局、その2日後に亡くなってしまいましたが、私たちの間で何とか決着がつけられたので、少しは心の整理ができました。

小倉さんが悔いていたことの一つは、膀胱がんの治療に関してでした。8年前に膀胱の全摘出手術を勧められたとき、小倉さんはそれを拒否しました。男性機

能を保ちたいという思いから、最新の自由診療を選択し、膀胱を残す治療を受けました。それが功を奏して、しばらくは順調に見えたものの、2年後に再発しました。その2年間、膀胱を残せたことに小倉さんなりの満足感があったようですが、最終的に全摘することになり、そのことを少し悔やんでいました。

このように、がん治療には様々な選択肢がありますが、患者がどんな選択をするかは非常に難しい問題です。私もがんの診断を受けた際、同じように多くの選択肢に直面しました。今は患者が自分の意見を医師に伝え、共に治療方法を選んでいくシェアード・ディシジョン・メイキングが重要になっています。しかし、選択肢が多すぎて迷うこともありますよね。

私はアナウンサーという仕事を選びましたが、その道に進んだ背景には、子供の頃からの経験が大きいです。小学校時代から人前で話すことが好きで、演芸会や文化祭で司会をしていました。中学や高校でも演劇や映画が好きで、映画ノートをつけるほど映画に夢中でした。このような経験が、後にアナウンサーとしての道を開いてくれました。

一つ感謝しているのは、私がアナウンサーになれたのは、子供の頃の歯科矯正のおかげだと思っています。

す。実は、私は子供の頃、歯並びが非常に悪く、八重歯が2本、ガチャガチャの歯でした。それを見かねた母が、私を歯科矯正に通わせてくれました。最初は嫌で嫌でたまりませんでした。今振り返ると、それがあったからこそ、アナウンサーとして自信を持って話せるようになったのだと思います。

私は母に聞いたことがあります。「あの矯正費用をどうして支払ったのか？」と。うちの家計は決して豊かではなく、父は地方公務員で、団地に住んでいました。母は私のために、祖父からお金を借りて矯正治療を受けさせてくれたのです。祖父には感謝しきれません。

アナウンサーになれたのは歯科矯正のおかげだと断言できます。どんなに話がうまくても美人でも、ハンサムでも、歯並びがひどいと、面接の段階で落ちてしまうからです。

しかし、今は矯正の治療方法が進んでいるのでしょう。ある程度の歯並びの悪さなら、内定が出た段階で矯正に通っている学生をたまに見かけます。

母が私にしてくれたように、親として子供の将来を見守ることの難しさを実感しています。私の母は、私が入前に立つ性格だと早くから気づき、そのルールを作ってくれました。今、私自身も3人の子供を育てていますが、母のようにうまくルールを作れるかどうか、悩んでいることもあります。

人生には3つの坂があります。「上り坂、下り坂、そして…まさか」。

まさか、私もがんになってしまうとは思いませんでした。私は仕事が忙しく、平均睡眠時間は3～4時間という生活を送っていました。そんな中で、がんの告知を受けたときは、なぜこのタイミングでと絶望しました。会社を辞め、フリーになった直後、わずか2か月後だったからです。

悪性リンパ腫、しかもステージ4という診断を受けました。遺伝子異常もあり、脳への転移リスクが高いという中で、医師から「いまの医学ではステージ4は手遅れではありません」と力強く背中を押され、入院治療に踏み切りました。抗がん剤の副作用は想像以上で、投与中は1回120時間の点滴を6回、外出も許されない過酷なものでした。

特につらかったのは「倦怠感」でした。鉛のように重い疲れが体を覆い、何もする気が起きない。ですが、治療の副作用を軽減する「支持療法」、中でも制吐剤のおかげで一度も吐かずに済んだのは大きな救いでした。吐き気や口内炎、味覚障害に悩まされながらも、「食べることは戦い」として、時間をかけて食事を続けることで、体力と気力を保ちました。

中でも家族の存在はかけがえのないものでした。特に年末年始、正月には妻が飾りを持ち込み、おせち料理を用意してくれたことで病室が一気に明るくなりました。また、当時高校生だった息子が祖母に教わって自ら卵焼きを作ってくれた時、「こういうときはおふくろの味のほうがいいだろう」と言ったその一言に、思わず涙がこぼれました。

また、「アピアランスケア」という、見た目のケアの大切さも痛感しました。抗がん剤の影響で髪の毛だけでなく眉毛まで抜け落ち、自分の顔が別人のようになってしまったとき、妻の提案で眉メークを始めたことで少しずつ気持ちが前を向くようになりました。人は見た目だけでなく、自信や尊厳をそこに投影しているのだと実感しました。

がんという病気は、体だけでなく心の支えも求められる病です。私は治療中に「頑張って」とは言われませんでした。その代わりに「頑張ってますね」と過去形や現在進行形で言ってもらうことで、共感と励ましを感じることができました。言葉一つの配慮がどれほど支えになるかを学びました。

私はこの経験を通じて、「引き算の縁」と「足し算の縁」という考え方に会いました。失ったものを数えるのではなく、新しく得た出会いや支えを数える。震災取材で出会った被災地の皆さんが、「あなたと出会えたのは津波のおかげ」と前向きに語っていた姿勢に重なります。私も、がんになったからこそ得た縁がたくさんあります。この講演の場も、その一つです。

がんになって良かったとは思いませんが、がんになったからこそ気づけたこと、得られたものは数え切れないほどあります。だからこそ、どんな困難にあっても、そこに意味を見出して前に進んでいきたい。そう思えるようになりました。

(文責：広報・編集委員会)

Living by Addition : Surviving Stage IV Cancer

Freelance Announcer

Shinsuke KASAI

What are the psychological states and challenges associated with side effects encountered when living with Stage IV cancer? What are the key aspects of cancer care in the Reiwa era? Unless “Showa-era patients” completely change their mindset, they may not be able to receive appropriate medical care.

As a lecturer who is also a “Showa patient” , I will share my personal experiences of undergoing Reiwa-era cancer treatment.

Key words : Cancer Care, Malignant Lymphoma, Appearance Care